今から四百年ぐらい前の豊臣秀吉の時代にはな、麦島に八代城があったったい。ところが、江戸時代の始めごろに八代に大地震が起こって、麦島にあったお城がくずれてしもうてな。

そんときの八代城のお殿さんは、加藤右馬允正方というお方でな、こんどは松江に八代城ばつくんなはった。今の八代宮の所たい。

そして、城下町ば洪水から守るために、古麓・萩原・松江と、長あか堤防ば、三年かかって築きなはったそうな。

萩原の堤は、球磨川の矢のような急流が、ちょうど突き当たるところで、水の勢いば弱めるために、山下天神ばねというてな、五つの石ばねで頑丈にしてあったそうな。おかげで、たびたびの大雨でも堤防がこわれることは、なかったそうじゃ。

ところが・・・

宝暦五年、六月一日から降り始めた雨は、来る日も来る日も降り続いてな。六月九日にとうとう瀬戸石と楮木の山がくずれて、大きな岩やどろが球磨川に流れこんで、そらそら、おそろしか大洪水になった。

「おうい、つつみがきれたぞう！」
「家がながされるぞう！」
「田んぼにも水が流れ込んだぞ。」
「そっちはあぶなかぞ！」

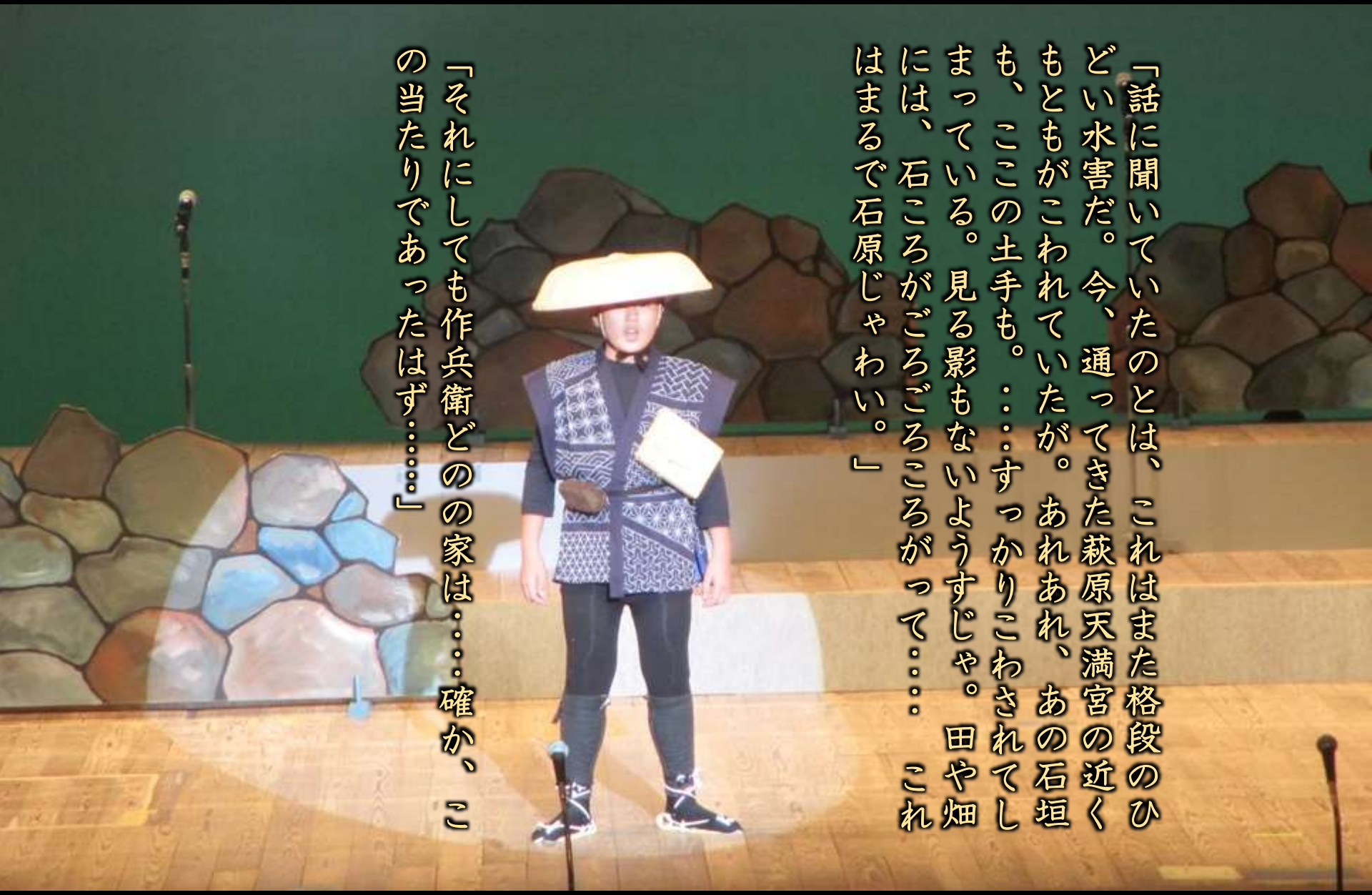
「おっかあ！こわいよう！」
「しっかりつかまってろ！　はなすんじゃなかぞ。」

「おおい！」「おおい！」
「助けてくれえ！」
「ここもきれたぞう！」
「ながされるぞ！」
「助けてくれえ！」

大洪水は　植柳の村もおそったのです。

「早う　おやじどのを　さがさねば」
「何もかも　流されてしもうて！」

「おどんたちには『早うにげろ』ていうて、
・・・とうちゃんだけ、なして家に引き返したと。
とうちゃんの命より大切なものなんかなかとに
・・・」
「とうちゃん！とうちゃん！」



「話に聞いていたのとは、これはまた格段のひどい水害だ。今、通ってきた萩原天満宮の近くもともがこわれていたが。あれあれ、あの石垣も、ここの土手も。・・・・すっかりこわされてしまっている。見る影もないようすじゃ。田や畑には、石ころがごろごろごろがって・・・・　これはまるで石原じゃわい。」

「それにしても作兵衛どのの家は・・・・確か、この当たりであったはず・・・・・」

「あ、もしもし。ちょっと　おたずねしたいのだが、よろしいかな。旅の途中で、八代がひどい水害におうたと聞いて、かけつけて来たばかりなのだ。ここらに作兵衛という百姓の家があったのをご存じありませんか。」

「作兵衛どんの家でございますか。この前の大雨で流されてしまいましてなあ。」

「作兵衛どんも、まだ行方が分からず、今も、あちらの方で、近所の人たちが作兵衛どんをさがしておりました。」

「ええっ！　あの作兵衛どんが、流されたのですか・・・まだ見つかっておらんのですか。・・・そうでしたか・・・」

「田んぼの様子ば見に、雨ん中を行かれたらしくてなあ。」

「おうい！　おうい！　おやじどのの体があがったぞう。」
「向こうの方ばい。」
「作兵衛どんは、あっちに流されとらしたっか。」
「見つかってよかったばい。村ん衆に　はよ知らせんば。」

「作兵衛どのが見つかったのか・・・・水に流されて・・むごいことよ。」
「早う、早う・・・こっちじゃ、こっちじゃ。」
「あそこの柳の木のかげじゃ。さ、さ、急いで。」

「おお、そなたたちは・・・作兵衛どのの娘ごではないか。」
「まあ　おじさま！・・・・」
「ひどいことになったなあ・・・・」
「父上は・・・雨の中を　飛び出して行かれて・・・・」
「田んぼを見に行かれたのです。」
「そうですか。・・・そなたたちを残して作兵衛どのもさぞかし無念であったろうのう。」

「ささ、急いで！村の衆も集まっておられるぞ。早う、作兵衛どののところに行かねば。さ、娘ごや。」

「おそろしかもんじゃ。大雨は・・・・。何もかんも流されてしもうた。」

「田んぼは　泥の海になってしもうて。・・・これからどうしたらいいもんか」

「馬も流されてな。かわいそうなことじゃった。」

「また、大雨の降ったら　おおごつたい。早うつつみば元通りにせんと。」

「庄やどのが村のもんに集まるようにとのことじゃが。何の話じゃろか。」

「わしらも　急がねば。・・・・おくれては　相済まぬ。」